COLUMN

今回のコラムから、3県（岩手、宮城、福島）の連携復興センターとJCN世話団体にも、震災以降の活動で影響を受けた出会いや期待する出会いというテーマで寄稿いただきます。初回はふくしま連携復興センター 代表理事の天野さんとJCN世話団体でもあるとシーズ・市民活動を支える制度をつくる会 代表理事の関口さんです。

ソウルメイトとの出会いも「はじめまして」からはじまる

天野 和彦氏（あまの かずひこ）
一般社団法人 ふくしま連携復興センター 代表理事

震災が起こると、いったんいろいろな関係が切れる。そして新たな人とたくさん出会う。しかし、もともとずっと市民運動をしていた人と、新たな関係を築くこともあります。「富岡町3・11を語る会」の青木淑子さんとは30年近く前、芝居を通して知り合って馬が合った。震災の時、青木さんが避難所に来て「富岡の人が大変だからできることがないかな」って言ってくれたから「おだがいさまセンター、ぼくと一緒にやりませんか」とお願いしました。

ジャーナリストの藍原寛子さんは僕が県の教育委員会勤務だった頃、福島民友の教育庁担当として意気投合して毎月のように呑んでましたね。震災直後は会ってなかったんですが、ビックパレットに取材に来て書いてくれた「足湯が溶かした2500人の張り裂ける思い」っていう日経の記事が、月間No.1になったんですよ。どちらも震災をきっかけに新たな関係の結びなおしです。

「初めまして」って会って、その時だけで終わりだと思ったら実は始まりで。そういう展開とかつながりってあると思うんですよ。「寄り添う」って言葉の意味合いを同じ風にとらえるとか。共感できる、響き合う部分を持っていれば、「ソウルメイト（魂の仲間）」ですよ。

【プロフィール】会津若松市出身。特別支援学校の教員として15年間障害を持った子どもたちの教育に携わる。東日本大震災では「ビックパレットふくしま避難所」の運営責任者を務めた。うつくしまふくしま未来支援センター特任教授。

原動力は同世代の活躍！

関口 宏聡氏（せきぐち ひろあき）
認定NPO法人シーズ・市民活動を支える制度をつくる会 代表理事

JCNをはじめ、東日本大震災支援活動で、私は多くの方々に出会った。その中でも自分自身が大きく勇気付けられ、日々頑張る原動力となったのは、同世代の活躍だ。私は2011年の発災当時27歳で、大学新卒でシーズに勤めてまだ4年目の若手職員だった。JCN等の活動で出会う方の中には、復旧・復興へ向けて懸命に取り組む同世代の姿があった。当時はNPOへの就職等も、今より一般的でない中で、被災地のため現地に飛び込み汗を流す背中を見るたびに、私も自分にできること、NPO法改正や寄付税制拡充、被災地支援施策の推進などを頑張ろうと胸に刻んできた。JCNは「誰一人取り残さない」そんなモットーを掲げている。「持続可能な開発目標（SDGs）」にもつながる考えだが、その実現は容易では無い。発災当時は、未曽有の大災害を前に、組織や部署を超えた連携・協力も進んだが、最近は徐々に当時を知る担当者や組織も少なくなりつつあり、「タテ割り」や「タコつぼ」に蝕まれつつある印象も受ける。東日本大震災で亡くなられた方々の無念を忘れず、個々の組織・現場で勇気を持って取り組む、そんな同世代と一緒に復興を前に進めていきたい。

【プロフィール】1984年生まれ。千葉県出身。2007年からシーズに勤務、東日本大震災支援ではJCNの制度チームを担当し、政府との定期連絡会議開催に尽力。当時から引き続き、認定NPO法人制度の活用促進にも奮闘中。

JCN REPORT VOL.10
JAPAN CIVIL NETWORK FOR DISASTER RELIEF IN THE EAST JAPAN
～東北の「今」を知り全国で復興を支えつづけるために～

発行：2018年12月
東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町2-2-1 新大手町ビル245 JNPOC 気付
TEL. 03-3277-3636　FAX. 03-6701-7332　URL. http://www.jpn-civil.net/
編集：JCN事務局スタッフ　デザイン：キシタカユキ　印刷：株式会社トライ

今だからできることがある
Walk with 東北
震災を忘れない気持ちをあらわすプロジェクトです

JCN REPORT

JAPAN CIVIL NETWORK FOR DISASTER RELIEF IN THE EAST JAPAN

VOL.10
NOVEMBER 2018

東北の「今」を知り
全国で復興を支えつづけるために

東日本大震災と担い手の思い

岩手県、宮城県、福島県、広域避難者支援において活動する多様な16名が登場

今、あらためて、東日本大震災に関わる16名の「声」に耳を傾け、「思い」に触れ、「何か」を考えてみませんか。

[Column]

- 天野和彦氏（一般社団法人 ふくしま連携復興センター 代表理事）
- 関口宏聡氏（JCN世話団体、認定NPO法人シーズ・市民活動を支える制度をつくる会　代表理事）

JCN Japan Civil Network
東日本大震災支援全国ネットワーク

東日本大震災で活動する「人」とのつながりを大切にしたい。

これまで、JCNレポートでは、東日本大震災におけるフェーズの課題や、暮らし、生業、地域活性化などのテーマ別の課題を取り上げ、みなさまへお伝えしてきました。今回のレポートからは「人」にフォーカスをあて、東北で活動する「人」を紹介していきたいと思います。

背景には、東日本大震災のみならず、東北が元来抱えていた課題として、農業・漁業・林業・商店街・まちづくり・地域コミュニティ・仮設および災害・復興公営住宅の自治など、すべてにおいて「担い手不足」があげられます。一方で、過疎化・人口減少を踏まえた復興まちづくりや、高齢者や震災弱者とよばれる人々への見守りや、命の大切さを伝えるために、震災から得た教訓や知見を広めようと活動している方々もいます。

JCNでは、東北の復興を考え、東北を興すことが、日本が抱えるこれからの社会課題への知見を得る機会でもあり、さらには、災害や平時から命を守ることにつながると考えています。

東日本大震災で活動する人とつながり、一緒に何かをするためには、活動する「人」を知ってもらい、顔の見える関係づくりが必要だと考えています。今回のレポートでは、どのような方が、どのような思いや価値観を持って活動しているかを紹介しています。共感するところがあれば、ぜひ、関心を寄せ、つながっていただきたいと考えています。今回（Vol.10）から岩手、宮城、福島で活動している12名、広域避難者支援活動で4名をご紹介していきますので、その人のこと、その人の活動や背景などを思いながら、お読みいただけますと嬉しく思います。

スタッフ紹介

岩手県担当：
中野圭（なかの けい）

岩手県大船渡市越喜来生まれ。代々漁師家系の16代目。早稲田大学商学部卒業、東日本大震災を機にUターン。2012年よりJCNなどNPO活動を開始し、2016年漁業に転身する。

宮城県担当：
杉村郁雄（すぎむら いくお）

2014年よりJCNの活動に携わり、現在は、広域避難者支援、事務局、宮城県を担当している。現地で活動する団体の「声」を多くの方に届ける場や機会を作りたい。

福島県担当：
鈴木亮（すずき りょう）

1972年神奈川県鎌倉市生まれ。ニュージーランド育ち。98年より環境系のNPO活動に参加。震災後、2012年9月よりJCN福島担当に。福島県双葉郡富岡町在住。スズメ好き。

広域避難者支援担当：
津賀高幸（つが たかゆき）

高知県出身。滋賀県立大学環境科学部卒業後、民間シンクタンクで、地域防災・災害ボランティア活動に関する業務に関わる。JCNは設立準備の段階から関わる。

JCN担当者より

岩手

復興が道半ばでありながら、日本の地方に蔓延している社会課題が同時に押し寄せているという、まさに「課題先進地」となった東北。この場所に、誰も経験したことがない課題解決と「生きる」ことに挑み続けている担い手がいます。女性が諦めずに輝ける社会を目指す活動。体を動かす場が物理的にも社会的にも減少した中で、場づくりを目指す活動。子どもを産み育てる環境を当事者とともに改善していくことを目指した活動。地域のビジョンをスポーツに見出し団体間の連携を創出する活動。1つひとつの活動に自分がどう「関わり」を持てるか、そのヒントとしてご一読いただき、東北地方と生きる自身の姿をぜひご想像いただければと思います。

●岩手県担当：中野圭

宮城

15,000戸以上の災害公営住宅、数多くの震災遺構・伝承施設、大規模な防潮堤の整備が進む宮城県ですが、ソフト面を大切しながら、活動されている方がたくさんおられます。今なお、被災された方一人ひとりと向き合いながら、丁寧に暮らしのサポートをされている方、子どもの心のケアや子どもが子どもらしく成長できる場をつくるために活動されている方、地域力の向上のために、仮設住宅や災害公営住宅でコミュニティづくりをされている方、震災での教訓や命の大切さを次の世代、次の災害に伝えるために活動されている方がいらっしゃいます。少しでもいいので思いを寄せることで、自分ごとして、何かを考えるきっかけになっていただければと思います。

●宮城県担当：杉村郁雄

福島

「ゼロからの新しいまちづくり」に挑む、福島県の復興のキーマンたちの多様な背景や動機を取材させていただきました。特に、福島県沿岸部、「浜通り」と呼ばれる地域の避難自治体にフォーカスしました。地元では人手不足、後継者不足、若者不足という言葉を聞かない日はないくらいですが、「復興の担い手」という言葉はほとんど使いません。迷いながらもできる事をする。気負わず、楽しく、一歩ずつ。やせ我慢の根競べを意地と笑顔でこなし、地域に骨をうずめる覚悟を持った人。不安につぶされながらも自分を信じて自らの意思で挑み続ける人。いずれお別れする日まで裏方を担う人。未来を夢見て経験を積む人。新たな「初めまして」のきっかけになればと思います。

●福島県担当：鈴木亮

広域

JCNの広域避難者支援活動は、Webや各地のNPO関係者から事前に話を聞き、実際に支援をしている人たちを訪ね、ブロック単位でミーティングをしながら、いろいろなご縁がつながり、ネットワークを広げていきました。このレポートでは、各地を回りながらつながった人たちを紹介していきますが、各地の避難者同士の支え合いをしている当事者の人たちも登場していただきます。被災した地域のみならず、日本の多くの人たちに大きな影響を与えた大震災。このレポートで紹介する人たちはそれぞれ活動している地域も、活動している内容も違いますが、おそらく被災3県と共通するお話も出てくるのではないかと思っています。そんな視点で読んでいただけるとうれしいです。乞うご期待!

●広域避難者支援担当：津賀高幸

大槌の子どもたちが、希望をもって生きていける町に

大久保 彩乃氏(おおくぼ あやの)
一般社団法人Tsubomi　代表理事

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

東日本大震災後、地域共生に取り組むNPOで活動しました。そのことが大槌町の課題を見つめ直すきっかけとなり、出産して母親になって大槌には子育て世代の居場所がないと感じました。影響を受けた出会いは、2016年から「子育てフェス」を開催しているのですが、その仲間ですね。他団体の皆さんとイベントを創っていく中で、互いに共感しながら、相談しあえる関係になれました。企業や商店の方にもご協力いただき（パワーショベル乗車体験、ロボット相撲、子どもたちのヘアアレンジ、写真教室、ハンドマッサージなど）、今では町民の人口の半数が来るぐらいの大きなイベントとなりました。来場者の方から、親子で“ずったり”（ずっと）居れた、ゆっくり出来た、とのお声をいただくと「やってよかったな」と感じます。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

団体としてだけではなく、町全体として子育て支援を考えられる仲間が欲しいですね。若い世代が一度町外に出て帰ってきたときに、希望をもって生きていけるか?と考えると、難しいと思っています。子どもたちが夢を活かせる場、働ける選択肢を増やしたいです。地方に居ても仕事が出来る、子育てしながら働ける環境づくりとして、母親たちの就労支援にも取り組んでいきたいです。母親になっても「ひとりの女性として輝ける」大槌町にしたいです。

地元の高校を卒業後進学のため上京、その後2009年にUターン。2011年、東日本大震災により被災し、故郷の復興に携わりたいとの思いから、外部支援団体に現地企画調整員として入職。その後独立し、2016年5月よりTsubomiを発足。

活動地域：岩手県上閉伊郡大槌町
Tel：0193-27-7559
Mail：tsubomi_ml@
googlegroups.com

スポーツで繋ぐ　宮古の笑顔・元気　そして、未来

関口 健氏(せきぐち たけし)
総合型地域スポーツクラブ／特定非営利活動法人エムジョイ

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

東日本大震災後、仮設住宅でひきこもり笑顔がない人々を見て、身体を動かせる環境作りから始めました。身体を動かす=心が動くと感じたからです。子どもたちが遊ぶ様子を見て、笑顔になっていくお年寄りを見て嬉しかったです。影響を受けた出会いは、青森県弘前市にある、NPO法人スポネット弘前さんです。過疎化が進む中で、地域の課題にも積極的に取り組んでいるスポーツクラブです。収益性と公益性を考えたとき、公益性に重きを置いていくことが重要なのだと思いました。また、いわて連携復興センターの経営ゼミで、「被災地の団体」から一歩踏み出している団体の皆さんと学びあえたことも、大きな刺激でした。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

震災後、各スポーツ企業が被災地へのCSRとして、運動器具など物資の援助や一流アスリートを招いてのスポーツ教室は有難かったし、盛り上がりました。宮古市内の企業さんの福利厚生の一環として、社員の皆さんのスポーツ教室も担当しています。夢は、沿岸部にはない子どもの遊び場をつくること!身体をおもいきり動かせて、自然体験も出来る場をつくりたいですね。幼いころにたくさんの遊びを経験すると、大人になっても運動をする習慣が身につくそうです。心も身体も健康な宮古市を、共に創っていけるパートナーに出会いたいです。

震災以後、宮古市で活動する有志とともに特定非営利活動法人「エムジョイ」を設立。現在事務局/クラブマネージャーとして活動中。主に高齢者体操指導や子どもの体力作り、親子レクレーション/各種自然体験会を担当。

活動地域:岩手県宮古市
Tel：090-2996-2381
Mail：m_joy385@yahoo.co.jp

地域を超えてつながる。次の世代へ残す「まち」をつくる

熊谷 耕太郎氏(くまがい こうたろう)
特定非営利活動法人再生の里ヤルキタウン 理事長 ／ 三陸気仙広域連携スポーツ特区推進準備協議会 現地代表

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

「二次的犠牲者を絶対に出してはならない!」という思いから、地域住民の交流の場が喫緊に必要と考え、コミュニティ広場を開設し、畑や花画廊を開放しました。私が影響を受けた出会いとは、様々な地域から来たボランティアの方々との出会いです。特に、秋田県の団体である「大舘ボラバスプロジェクト」と「ひまわり“心の絆”プロジェクト」の皆さんには、7年半が経過した今でもイベント開催ごとに継続的に支援して頂いています。地域を超えての出会いがこの地域の元気につながり、また秋田の子どもたちとの交流は地域の子どもたちの成長においても大きな影響を与えたと思います。スポーツを核とした次世代のまちづくりを取り組んでいくきっかけにもなりました。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

この地域は恵まれた特有の気候が最大の財産。スポーツを核として広域で連携し、老若男女、障がい者、いろいろな人が様々なスポーツを体験出来るような場所(エリア)「スポーツオアシス」を実現したいです。釜石ではラグビーワールドカップが開催されます。陸前高田では、祈念公園や道の駅ができます。今このタイミングだからこそ、地域を超えて連携することや、全国から関わりたいと思う人たちに発信していくことが大事なのです。現在、“絶対忘れてはならない!後世に繋ぐ!”「3.11復興祈念マラソン」の実現に向けて活動しています。例えば、企業からの資金面バックアップ、専門家からの実現可能性についてのアドバイスや助言等、共に実現に向けて取り組んでくれる人、応援してくれる人との出会いを待っています。

1950年陸前高田市の農家に生まれ卒業後一時就農するも農業の大転換期、農業経済がブレーク、耕地の狭い当地での営農を悲観して逃避。一方、国土総合計画、高度成長時代。終身雇用一筋に40年間サラリーマン。東日本大震災を機にUターンし、NPO法人再生の里ヤルキタウンを設立。

活動地域：岩手県陸前高田市
Tel：090-4880-8488
Mail：yarukitown@gmail.com

ママたちと共につくる子育てしやすい社会

佐藤 美代子氏(さとう みよこ)
特定非営利活動法人まんまるママいわて 代表理事／助産師

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

影響を受けた出会い‥は2人います。一人目は、まんまるママいわての副代表理事でもある佐々木一愛(かずい)さんです。東日本震災で被災し、まんまるママいわての利用者であった彼女が、今では法人のスタッフになってくれました。支援される方がいつまでも支援される側じゃない、つまり“支援循環”という気づきを与えてくれました。彼女から女性の強さ、しなやかさを改めて認識させられました。ここで彼女の働く姿を見ると、私自身初心に立ち返ることができ、組織としても利用するお母さん達も彼女から影響を受けエンパワメントされています。二人目は、NPO法人いわて連携復興センターの葛巻徹さんです。彼からはコミュニティ・オーガナイジングやNPOを勉強する機会を沢山紹介して頂いています。医療しか知らなかった私がここまで活動を続けられ、市民と一緒に課題を考えることができているのは、伴走してくれる中間支援組織の存在が大きいです。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

これから何かしようと思っている若い女性に会いたいです。活動を始めた当初、私にはお金も人脈もアイデアもありませんでしたが、“想い”だけはありました。沢山の人の応援と支援を頂き、今、想いをカタチにすることが出来ています。今度は、私が想いがある人を育てる立場になりたいです。人を育てることで、私自身も成長できます。そして、わからないことがあった時に頼れる、様々な事例や伝手を持っている方にメンターになって頂き、ともに歩んでいきたいです。

助産師18年目。東日本大震災をきっかけに有志で母子支援団体を立ち上げ、自身も産後5か月で支援に奔走。岩手県南を中心に、妊婦・乳幼児を持つ母親達の不安解消の為「産後ケア事業」「育児サロン事業」等が主事業。

活動地域:岩手県花巻市
Tel：090－2981-1135
Mail：info@manmaru.org

子どもらしい成長を願う出会い

廣川 和紀氏(ひろかわ かずき)
一般社団法人プレーワーカーズ 理事/統括マネージャー

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

震災当初、NPO法人日本冒険遊び場づくり協会で活動していた須永力さんに影響を受けました。須永さんは、子どもの心のケアが必要ということで、岩手、宮城、福島で活動されていましたが、特にすごいと感じたことが、子どもが持っている能力を引き出すところでした。私はボランティアで関わっていましたが、会社を辞め、須永さんと一緒に活動し、現在の団体を立ち上げました。須永さんが子どもと同じスタンスで私に接してくれることで、活動への責任感や自律性が芽生えてきました。それは、私が子どもと接するときに、本当に子どものためになっているか、地域に入るときに、本当にその地域のためになっているかという自分のスタンスにも影響を与えてくれています。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

子どもたちの遊び場づくりという活動している私たち、プレーワーカーズの活動には正解がありません。子どもたちと一緒に正解と思えることを考えられる人との出会いを期待しています。私が願うことは、子ども時代は子どものままで育ってほしいということです。社会では、人とつながり、話し合って、答えを見つけ、行動して、修正する力が必要だと思いますが、それは遊びの中から、育まれ、生かされることと考えています。そのためにも、子どもを自分の枠にはめるのではなく、自然なことを自然のまま向き合える人と一緒に活動したいと思います。将来は子育て施設やカフェなど様々な場所とも連携して遊び場が増えていくことを願っています。

1986年東京都生まれ、仙台在住。遊具メーカーに勤める傍ら、プレーパークなど子どもに関わるボランティア活動を続けてきた。その後、NPO法人に転職し、職業プレイワーカーとしての道を歩み始める。2015年に仲間と共に団体を立ち上げ、理事就任。3歳娘の父。

活動地域:
名取・気仙沼を中心に東北各地
Tel:022-397-7507
廣川携帯電話:090-6459-5225

命の大切さを伝える出会い

中川 政治氏(なかがわ まさはる)
公益社団法人みらいサポート石巻 専務理事／3.11メモリアルネットワーク

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

時系列に沿って大きく3つあると感じています。1つ目は、震災直後に全国からノウハウを持った多様な団体が災害支援を行う姿をみて、助け合える国として日本が変われるんじゃないかという実感を持ちました。2つ目は支援を受け入れる地域の方々の姿勢に影響を受けました。多くを喪っているにもかかわらず、震災直後に自分の持ち物を分けあうなど、自分のことはおいて、隣人を気遣う姿勢や、外部からの支援者とともに一緒に歩んでいくんだという気持ちに感銘を受けました。3つ目は、語り部さんとの出会いです。大切な家族や暮らしを失いながらも、命を守る大切を伝えることは、自分の責務であると歩みだしている姿勢が印象的でした。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

被災地の行政、社協、民間などの大きな社会の変化が、制度や施策とリンクして動いていることを実感しています。盛り土や防潮堤が地域にとって本当に良い選択だったのか、少子高齢化が進む地域で何に取り組めばよいのか、この先、東日本大震災の教訓から僕らが日本に何を残していかないといけないのか、そういったことを一緒に話せる人との出会いを期待しています。各地で様々な災害が発生し、尊い命が失われています。命を守るために、普段から自然災害や社会の課題を自分事としてとらえ、自分で判断し、責任を持って行動することが大切なことだと感じていますし、また、そのような人が増えることが、よい地域をつくることになると考えています。

京都市生まれ。国際協力NGOで緊急支援の現地責任者を経験。東日本大震災後の石巻で、NPO等による震災支援の連携をサポート。現在は語り部等の住民主体の伝承活動を支え、3.11メモリアルネットワーク理事を兼職。

活動地域:宮城県石巻市
URL:http://ishinomaki-support.com/
Mail:info@ishinomaki-support.com

自分の内面をみつめながら、一人ひとりと向き合う

真壁 さおり氏(まかべ さおり)
宮城県サポートセンター支援事務所

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

改めて、振り返ると「特別」な出会いはなかったように感じています。震災以降、相談業務という仕事の特性上、何千人の方とお会いしてきましたが、その一人ひとりとの出会いが自分の経験や知見になっていると思います。ただ、震災後、特に強く意識し始めたことは、出会った人、一人ひとりと向き合いながら、その人が持っている力やその人らしさがなんであるかを探そうとしていることです。仕事で疲れたときに、自然に触れることで、リフレッシュをできると思ったが、叶わず、人と向き合うことが自分の精神の回復につながることも実感しました。まさに、出会った人、一人ひとりと向き合うことが私の原動力になっていると思っています。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

このような人と出会いたいというのはなく、自然の流れに任そうとしています。東日本大震災や社会全体として考えなければいけない課題はたくさんあると思います。その課題に対して、目が向くこともあると思いますが、もっと、自分の中に目を向けることが大切だと思っています。例えば、障がい者と出会った時や電車の中で泣く子どもと出会った時、自分は何を感じ、どのように接するのかを考えることが大切なことだと考えています。そういったことを考えることが、一人ひとりの行動変化につながり、その積み重ねが東日本大震災で被災した人のことを考えることに繋がると思っています。

高齢者介護の仕事を経てせんだい・みやぎNPOセンターに勤務。東日本大震災後、みやぎ連携復興センター立ち上げに関わり2012年夏から現職。県内外の社会福祉協議会、NPO、自治体職員等、支援者支援を行う。

活動地域:
宮城県全域、全国の災害被災地等
Tel:022-217-1617
Mail:miyagisaposen@mbr.sphere.ne.jp

本人から話を聴くことの大切さ

畠山 輔氏(はたけや たくす)
一般社団法人ボランティアステーション in 気仙沼 事務局長

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

NPO法人よろず相談室の牧秀一さんから傾聴の大切さについて学んだことが今でも活動に影響していると思います。震災当初、アドバイスをせずに、傾聴することがそんなに大切だと考えていませんでした。牧さんから、文句という反応があるうちは、何を言われてもきちんと話を聴きにいくように言われ、傾聴を繰り返した結果、「家があるやつとは話さない」と言われた方から話をしてくれるようになり、つながりを持てるようになりました。看護師や保健師など専門家が重宝されると思っていましたが、一般市民でもできることがあると実感することができました。今でも自分が思ったことや過去の教訓が必ずしも正しいわけでなく、住民の方の声をきちんと聴くことを大切にして活動しています。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

現在、気仙沼市の仮設住宅や災害公営住宅で、お茶会などを通じて、住民と信頼関係をつくりながら、コミュニティづくりを行っています。地域創生で新しいことも生まれていますが、既存地域のコミュニティづくりと融合することも大切だと感じています。また、十分に朝ご飯が食べられない子ども多くいますし、人口は減少しているのに、世帯数は増加しているという傾向もあります。仮設住宅、災害公営住宅も含めて、様々なことが気仙沼で起きています。外部情報だけでなく、現地に来て、話を聞いて、気仙沼で起きていることを一緒に考えてくれる人との出会いを期待しています。

1983年、宮城県気仙沼市出身。震災後(一社)気仙沼復興協会福祉部にて仮設住宅のコミュニティ形成支援を行う。2011年12月現団体の立ち上げへ参加。災害公営住宅のネットワーク形成担当。地域において安心し暮らせる環境作りを行っている。

活動地域:宮城県気仙沼市
Tel:0226-23-0899(法人代表)
Mail:tasuku@vsk311.com／info@vsk311.com

自分がやりたいことしか、やるな

平山 勉氏(ひらやま つとむ)
双葉郡未来会議 代表

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

福興浜団の上野さんです。2011年6月11日に南相馬の萱浜で鎮魂のイベントがあって、サックス奏者の坂田明さんが演奏しにきたんですよ。萱浜は、上野さんの家があった津波被害のひどかった場所。その後、年に1回か2回くらい、床下のヘドロ出しとか、捜索の手伝いをするようになって、富岡が警戒区域再編で入れるようになったら、上野さんの方から「富岡で捜索しましょう」と働きかけられたんです。遺品とか、大事なものが出てきた貴重な活動だったと思います。あの時、坂田明さんが来なければ萱浜には行っていなかった。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

一番は、自分より下の世代に出てきてほしい。一番はそこ。芽はあるけれど、まだまだかな。外からくる人は、福島のためとか、誰かのためとか考えないで、自分がやりたい事をやるべきだと思います。その結果として誰かのためになるのはいいんですけどね。ここら辺は、高齢化が進み、後継者不足が顕著だけど、もともとそういう地域です。なおかつ避難先に落ち着いて戻ってくる理由もなくなり、という中で、よくいうのが「ゼロからのまちづくり」。戻すとかではなく。例えば、サッカークラブができるとか、地元で集まって卓球をやろうとか。なんでもいい。そういうのも媒体になりうる。自然にしていればいいのかなと。戻ってきた人と新しく入ってきた人でうまくやっていくにはどうしたらいいのか、お互いに歩み寄れるような出会いがあればいいですね。

1966年富岡町生まれ。富岡一小、一中、磐城高校、武蔵野音楽学院卒。双葉郡未来会議のほか、ノーマディックレコード、ホテルひさご、富岡インサイド、相双ボランティア、ふたば地域サポートセンターふたすけの代表も務める。猫好き。

活動地域:福島県双葉郡富岡町
Tel:0246-38-7512
Mail:futabafuture@gmail.com

イメージを変えたくて

和泉 亘氏(いずみ わたる)
ゲストハウスあおた荘 管理人

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

震災後、郡山の専門学校を出て東京や広島で建築系の仕事をしたんですが、重労働で心身を壊してしまい人生の路頭に迷う形で福島に戻った時、出会ったのがJPFの池座剛さんです。福島の現状を教えてもらいつつ、人生相談というか「和泉君自身はどうしたい?」「自分もNPO的な、福島に関われる仕事をしたいです」と。それでみんぷくに入り福島市に避難している浪江の人に出会って、浪江に興味を持ちました。プライベートな話ですが、浪江に行くと決めつつ、本当に行くか迷っていて、背中を押して欲しくて「やっぱり迷ってます」と言った時、すごく厳しい口調で「いろいろな人が道を作ってくれてるのに選ばないってのはないんじゃないか」と。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

浪江に来てからの一番の出会いは一緒にあおた荘となみともをやっている奈央子さん。浪江の一部避難解除後から「浪江に住みたい」って毎週通うようになって、相双ボランティアや浜通り合衆国、浪江の夏祭りに参加していく中で知り合いました。世間一般の浪江町のニュースは「まだ800人しかいません」まだ、それしかいないんだ。そうじゃなくて、ゼロ人だったのが800人に増えて、その一人一人は日々つながって、連携して、助け合って。実や焼き肉屋が2軒もある!とか、イメージを変えたくて、県外にもどんどん発信していきたい。福島県や双葉郡、浪江に興味を持つ若者はたくさんいると思います。そういう移住者と楽しくなれる場所を作っています。

福島県白河市出身。震災時は高校3年生。「なみえ会議」を運営している団体「なみとも」副代表。前職はNPO法人みんぷくコミュニティ相談員・福島市担当。2017年4月から浪江町に愛犬そうちゃんと在住。

活動地域:福島県双葉郡浪江町
Tel:090-2320-3874
Mail:namie.aotasou@gmail.com

あとちょっとだけお手伝いさせていただきます

廣田 英行氏(ひろた ひでゆき)
一般社団法人八色(基幹相談支援センターふたば) 代表

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

もともと2013年1月にガンで亡くなられた広瀬明彦氏の呼びかけで、関西の障がい福祉系12団体で連絡会を組んで、8人でシフトを組んで現地支援を始めたのがきっかけです。印象に残っているのは、いわき市のNPO法人シェルパの古市貴之さんです。安否確認に一緒に回った時、「不安だけどNPOを立ち上げてやるしかないが、人が足りない。一緒にやって欲しい」と言われて、古市さんのふるさとへの強い思いを感じました。しかし僕は外人部隊のようなもの。「あとちょっとだけお手伝いさせていただきます」と法人立ち上げの時、最初から2年と決めていたので、それを伝えていたのですが、「帰る処があるんやね」と冷ややかに言われたりもしました(笑)。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

今年になって西日本や北海道で災害が起こっています。一時的、集中的な応援部隊は絶対必要です。つきつめていけば、ここで生きていくと覚悟を決めている人が日々をどう生きるかです。どこか特定の地域だけに力を注げば何とかなるというものではないのかな、と。根底にそういう思いを持った人があちこちにいて、つながって、それぞれの地域でそれぞれの積み上げをしていくなかで、社会のありようを変えていけるのかなと思います。団体とか個人という垣根を超えてキーマンと出会って、一緒に協働できることを探しています。地域を見て頑張っている人。ひとりの人やひとつの事業でできることは限りがありますが、人のつながりを深めていけたら。

2011年5月に奈良県天理市から宮城県石巻市へ東日本に支援に入る。その後、福島県いわき市でNPO法人シェルパのメンバーとなり2017年より基幹相談支援センター事業を法人化して代表となる。前職は奈良県自立支援協議会東和圏域マネージャー。

活動地域:福島県双葉郡楢葉町
Tel:0240-23-6389
Mail:hir0.sky@kcn.jp

直売所にハマって選んだ進路

佐藤 勇樹氏(さとう ゆうき)
福島大学行政政策学類 1年

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

広野町の二ツ沼総合公園の直売所の農家のおばちゃんたちです。米国でファーマーズマーケットが地域の老若男女のおしゃべりの場になってることに感動して、野球部を辞めてFMふたばプロジェクトを立ち上げました。栽培用に借りられる畑を見つけたくて、夏休みに丸三日かけて広野町の畑の数を調べてました。「これ耕作放棄地だ、使えそう!」「あれ?直売所があるじゃん!」「すいません、この直売所について聞きたいんですけど」って尋ねたんです。それから毎日のように通っておしゃべりするようになりました。農家さんたちにホウレン草の育て方とか、浜通りの農業の大変さなどの話を聞きにいかなければ、畑にハマることもなかったです。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

将来は富岡や浜通りで農家さんに関わる仕事をしたいです。ふたばみらい学園とか双葉郡未来会議で、同い年でファッションショーを短期間で実現しちゃう人や、地域を愛してスゴイ活動をする人とか、たくさんの魅力的な人とつながれました。大学でもプロジェクトを作ってもっとたくさんの農家さんと出会いたい。まだ大学のある福島市の農家さんも知らないし富岡の農家さんも知らない。「美味しいって言ってもらいたい」とか、共通する部分もあるけど、使う肥料とか、ハウスを使うかとか、この人はどういう思いで、どういう栽培方法なのかを知りたい。将来はそういういろいろな農家さん一人一人のことを伝えたいと思っています。

福島県双葉郡富岡町出身。震災当時は小学5年。ふたばみらい学園在学中にFMふたばプロジェクトを立上げ、2018年8月に高校生によるファーマーズマーケットを開催。1期生として卒業。現在、福島大学行政学類1年。

活動地域:福島県福島市
ご連絡はJCN事務局まで
お問い合わせください

ふるさとを軸にしてお互いを想い、つながりを大切に

木幡 四郎氏(こわた しろう)
絆・ふるさと想う会、元東北の絆・サロンFMI会

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

この活動を行うきっかけは、避難者一人ひとりの想いと出会ったことです。避難当初、町田市の方たちが開いたサロンで避難している人と出会ったり、いわきナンバーを頼りに声をかけて歩くようになりました。そして、避難している人にとって、方言で話したり、立場に関係なくつながることが生活の一歩を踏み出すために必要と気づきました。同じ避難者だからこそわかるその想いや言葉を聞いて、どうにかしなければならないと思いました。それが「東北の絆・サロンFMI会」を結成した理由です。いまそれぞれが独り立ちできるようになり解散しましたが、尽きない課題に向き合うためにも、より広域でのつながりや助け合いが必要と感じています。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

私たちの活動は絆なんです。つながっている方々が孤立せずに、お互いに励ましあい助け合いながら充実した生活を送れるようにしていくための土台づくりをしています。帰る、帰らないに関わらず、新たな生活を送るには人との関わりが欠かせません。各地のサロンや団体とつながっていくことも、新たな出会いを見つけるきっかけになるはずです。そのために交流の内容を変えたり、団体を超えて一緒に企画するなどより多くの人が参加できるような工夫もしています。語り部をしたり、校歌を残したり、震災前の町を忘れない気持ちも持ちながら、ふるさとを軸にしてお互いを想い、つながりを大切に活動していきたいと思います。

1947年福島県浪江町生まれ。震災後は東京都町田市に避難し、当事者団体「東北の絆・サロンFMI会」を結成。現在は「絆・ふるさと想う会」の代表を務め、浪江町を軸としたつながり作り、町民の力になれるような活動を行う。

活動地域:関東一円
Mail:kowata@oasis.ocn.ne.jp

自分自身の暮らしと心の安定が大切

梶谷 美由紀氏(かじたに みゆき)
わっかラボしまね

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

島根に避難した頃は、いわゆる震災ハイで、自分にできることはないか闇雲に動き回っていました。その中、繋がった避難者仲間と「わっかラボしまね」という会をつくり、交流会をするようになりました。手探りかつ手弁当の活動に、少しずつ疲弊していくのを感じていた頃、中国地方に避難した仲間からのご縁で、他県で避難者支援に取り組んでいる人たちと出会う機会があり、それまで知らなかった他の地域ごとの取組、工夫のしかたや助成金のことを知ることができました。活動に役立っただけではなく、同じ避難者でも抱えている背景が違い、支援のしかたはひとつではないこと、無理なく自分たちらしくやっていこうと思えるキッカケになりました。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

震災からを振り返ると、避難した当事者として数々の課題にぶつかりました。避難先の島根は故郷とはいえ長年離れていた土地。これまでの暮らしや価値観のギャップ、子どもの不登校…など苦しいと感じることもありましたが、自分自身を見つめ直すこともできました。避難者のために動くのであれば、自分自身の暮らしと心の安定が大切だと。避難して5年目、過疎の進む故郷に100年先も子どもたちの笑い声があることを願い、島根で知り合った友人たちと起業し、地域の食やワクワクを発信する店を始めました。ゆるやかに活動していくために、地域で根をおろし、暮らす人として「多様性」を認めあいながら地域の人との繋がりを紡いでいこうと思っています。

故郷島根県大田市に子ども３人と避難。避難者仲間と「３１１ご縁つなぎネットワーク わっかラボしまね」を立ち上げる。また、地域づくりなどを目的に株式会社neccoを設立、レストハウス「山の駅さんべ」運営など行う。

活動地域:島根県
https://www.facebook.com/miyuki.kajitani

自分の価値観と向き合い、新たな気付きを

大塚 茜氏(おおつか あかね)
特定非営利活動法人 和(なごみ)

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

避難してきた方のお話を聴いていると、「不安」というキーワードが多く聴かれます。避難してきた人たちの声を聴いていく中で、この不安には様々な種類とグラデーションがあることに気づいていきました。大きく分けると、震災と避難を経験したことから発生する不安と、それ以前から抱えていた不安の2つです。後者の不安は、ひょっとしたらもともと持っていた「生きづらさ」が、震災と避難の体験によって、より鮮明に感じてしまうようになったのかもしれないと考えるようになりました。そんな時、対人援助論の研究者である村田久行先生(元京都ノートルダム女子大学教授)の村田理論に出会いました。村田理論では、対人援助とは、苦しみを和らげ、軽くし、なくすためのケアであるとし、苦しみについて理論的に考察し、そのケアについての手法を実践的に研究しています。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

これまで避難者の相談に対応してきて、避難者の方も支援者も、これまでの知識や経験が通用せず、困ってしまう場面が多々あるのではないかと思います。これまで関わった人たちと、日々の相談のこと、困っていることをあれこれと語らうことを重ねてきました。この語らいの中で、自分の価値観と向き合い、そうだったのか!と新たな気付きを得ていく瞬間が何度かありました。そういう時の顔はとても美しいなぁと思っています。これからもたくさんの新たな気づきと美しい瞬間に出会いたいです。

1978年佐賀県生まれ。保育士・精神保健福祉士・僧侶。認可外保育園と配食事業の立ち上げ経験をもとに、東日本大震災支援活動を展開。2015年特定非営利活動法人和を設立。以降、避難者生活相談の担当として活動。

活動地域:京都府とその周辺
Tel:075-753-5181
Mail:info@fucco-nagomi.com

いろんな場面で、いろんな人と議論を重ねる

齋藤 和人氏(さいとう かずと)
特定非営利活動法人山形の公益活動を応援する会・アミル

Q.震災以降の活動で影響を受けた出会いを教えてください。

地震発生の直後から、山形県庁に設置された「災害ボランティア支援本部」に行ったりしていましたが、中間支援組織(NPO支援センター)としてどうすればよいかはっきりしないままでした。そんな中、せんだい・みやぎNPOセンターの加藤哲夫さん(故人)から「つなげることがあればやっていきましょう」と突然のメールがありました。加藤さんとメールでのやりとりをする中で、中間支援組織としてやるべきことが見えてきました。そして、「「つながろう!ささえあおう!復興支援プロジェクトやまがた」事業の展開へもつながりました。思い返すと、加藤さんは震災以前から山形のことも気にかけてくださり、病床からの激励には本当に勇気づけられました。

Q.今後期待する出会いを教えてください。

復興支援だけではなく、山形の地域社会のため、県内のNPO支援のために、もっといろんなセクターの人たちと出会いたいと思っています。例えば、企業や商工関係の人たちの動きもあるようですが、まだつながりが十分とは言えません。こういった企業の方たちともSDGsを共通言語に互いにできることを話し合えるとよいかもしれません。お互いにどういう考えを持っていて、なにができるのかは、議論を重ねる中で見えてくることがあると思っています。いろんな場面で、いろんな人と議論を重ねながら、共通の思いを確認しながら、ネットワークを広げていきたいですね。

1951年東京都生まれ。スキー宿を経営しながら2003年よりＮＰＯ活動に参加。基盤強化や組織マネジメント支援を軸にＮＰＯ支援を展開するＮＰＯ法人山形の公益活動を応援する会・アミルの立ち上げに関わり現在に至る。

活動地域:山形県
Tel:023-674-0606
Mail:kazuto@amill.org